スプラッシュフェスティバル

9月14日(土)　～　9月16日(月)

IN　兵庫県立兎和野高原野外教育センター

	午前	午後	夜
1日目	施設に向け出発	水鉄砲大会	作戦会議
2日目	朝食づくり、フェス準備	スプラッシュフェスティバル	グループタイム
3日目	清掃・思い出工作	結果発表・施設を出発・解散	

一日目：　まだまだ残暑が続く中、水鉄砲を撃ち合い、存分に涼しくなっていただきます。尼崎に全員揃い、キャンプ場へ出発しました。バス車内では自己紹介からレクリエーションまで様々な内容から皆で交流を深めました。瞬く間に時間は過ぎ、あっという間にキャンプ場に到着しました。施設に到着後、昼食を済ませ、入室をし、水着に着替えて、水鉄砲を持参し、いざキャンプ場へ！！初日は水鉄砲を撃つ練習をしました。対象物を撃つ練習や、グループ内で撃ち合い、“撃って避ける”練習を行いました。最後にグループ対抗戦も行いました。どうすれば、【当てられずに当てるか】をグループで相談している様子が伺えました。夕食を済ませ、夜はチームに分かれ、ユニフォームづくりをしました。黄色と赤色のチームに分かれ、それぞれのチーム名を考え、共通したユニフォームを作りました。この辺りから各々の気持ちに「勝ちたい！」想いが芽生えており、発言や表情から伺えました。

二日目：　起床時間まで各部屋は静かで、ぐっすり休まれていました。起床時間から元気な声が聞こえてきましたので、今日一日を楽しみにされている雰囲気を大いに感じる事が出来ました。二日目は一日中、キャンプ場にて過ごしますので、準備を万端に整え、出発しました。朝食は定番メニューの“パックサンド”です。作り方をご存知の方が各グループに数名おられましたので、作り方をお任せし、教え合いながら楽しく作り、召し上がっていただきました。お腹が減っていたのでしょうか、残す事なく完食されました。午前中はフェスティバルの準備に費やしました。チームの旗を作りました。チームの共通のマークや模様を作り、各グループで作りました。勝ちたい気持ちを旗から感じる事が出来ました。残った時間はユニフォームを更にカラーリングしたり、陣地を決めたり、色水を作ったりし、午後の本番に向けて備えました。昼食をしっかり食べたあと後、水着に着替え、作ったユニフォームを見に纏い、ついにフェスティバルスタートです。水鉄砲に色水を充填させ構える様子はソワソワされており、【武者震い】をされていました。号令と共に一斉に走り始める姿はまさに『合戦』です。前線で戦う人もいれば、後方から支援する人、旗を守る人、ただ突っ込むのではなく、グループごとで作戦や立ち位置を決めており、かなり考え込まれた布陣でした。全部で三回戦を行いましたが、回を重ねるごとに、より連携が取れた動きが見られました。全ての回が終わるとノーサイドです。お互いの頑張りを讃え合いました。夕食後は、思った以上に皆疲れておられたので、キャンプファイアを変更してグループタイムとしました。部屋でのんびりしたり、体育館で遊んだり、夜の散歩に出掛けたり、グループにおいて思い思いの夜を過ごしました。就寝時間前から眠そうにされている方も多く、部屋の灯りが消えるとすぐに寝息が聞こえてきました。

三日目：　起床の合図までぐっすり休まれていました。起床後は片付けや荷物の整理、清掃と大忙しです。皆手分けして進めました。清掃を済ませ、遅めの朝食をいただきました。荷物を施設から出し、昨日のキャンプ場へ向かいました。こちらで最後のプログラム、【焼き板】を行いました。今回、沢山の思い出を作ったので、その中で一番印象に残っている光景を絵にしていただきました。水鉄砲の絵ばかりではなく、昨夜のグループで過ごした絵やご飯の絵もあり、思い出は様々のようでした。思い出として、周りのメンバーやリーダーに名前を書いてもらっている方もおられ、今回のキャンプへの思い入れを感じることが出来ました。昼食を済ませ、ついに施設を出発する時です。お世話になった施設に別れを告げ、バスは出発しました。帰りはDVDを鑑賞し、歌を唄い、談笑を楽しみ、最後までキャンプの仲間と大いに楽しみました。

＜キャンプ総括＞

今年は無事に三日間催行することが出来、ホッと胸を撫で下ろす事が出来ました。今回は例年とは異なり、約半分の人数での開催でした。チームも2チームとなり、勝敗が明確に分かれる形となりました。フェスティバル中は、相手チームへ敵意を剥き出しにし、必死に撃ち合っておられましたが、試合が終わると【ノーサイド】です。お互いの健闘を讃えあう素晴らしい様子を伺う事が出来ました。特に、「◯◯くんの水鉄砲、メッチャすごいね！！」と相手を褒める様子が見られ、嬉しそうに返しておられました。メンバーにとって勝ち負けは重要ですが、それ以上に一緒に楽しいキャンプを作ってくれた相手に感謝を持たれていると感じました。大人数だと賑やかな雰囲気を感じられますが、少人数の相手を想う気持ちがよく表れるので、これも素敵だと思いました。　（竹中　哲郎）